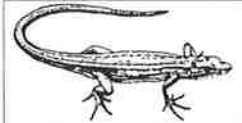


財団だより

多摩川

1997.6 第74号



カナヘビ (カナヘビ科)
トカゲに似るが体はカナ色(褐色)で、体のわきの黒線は後足のつけ根までで尾に至らないので、トカゲと区別できる。尾が長くヘビのようなのでカナヘビという。草むらにすみ、昆虫類を食う。全長16～22cm。



残堀川・砂前橋より上流を望む('97.5.16撮)

■多摩川現風景■

(30) 残堀川の水流復活

残堀川は瑞穂町の狭山ヶ池を水源に、武蔵村山、昭島、を経て立川市で多摩川と合流する全長14.5キロの一級河川であるが、6年ほど前から水源からしばらくは水流があるが、その下流では涸れ川になってしまう状態となっていました。

原因は、河川改修の際、河床の20センチほどの関東ローム層を掘削した結果、砂利層が露呈して、水が地下に浸透してしまっただけで、昔、玉川上水の工事の時も、福生で水が全部抜けてしまい、水路を変えたことがあって、その掘跡が「水喰土公園」で見られる。また最近、府中でも「無駄堀」とか、「空堀」とか伝承されている遺構がみつかり、これも水が吸い込まれるとか流れないとかの理由で変更されたものようである。川とか用水は人工を加えたらなかなか思うとおりににはならないことがあるようだ。

残堀川の場合も、涸れ川の水流を復活するために、東京都は採石現場の副産物である硬質砂岩が粘土分が多くふくまれていることに目をつけ、これを利用して、河床にしきつめる工事を行った。それぞれ瑞穂町の水源から1.2キロの地点から170メートルの間と、立川市の昭和記念公園内とその少し上流の1.2キロの区間でその工事をおこなった。今回はこの二つの箇所を現地に見た。瑞穂町の現地では流れが甦

り、ワンドにはカモが二三匹遊んで、のどかな川の風景が見られる場所もあり、立川の昭和記念公園内の残堀川には一部水が溜まっている部分もあるが、大半はまだ水が流れていない。昨年、見た時はまったく涸れてしまっており、多少は改善されているようではある。水の流れていない川は川とは言えない。昨年、都市化により、雨水の浸透が減り、地下水が減少し中小河川については、恒常的に水流の枯渇が見られるようになった。このような試みが有効であり、他の川の枯渇対策にも役立てば喜ばしい限りである。

●関連する財団の研究助成

(学術研究)

- ① 多摩丘陵における水循環機構と都市化によるその変化に関する研究
1981年 虫明功臣 東京大学 (No.42)
 - ② 多摩川に流入する丘陵地小河川の流出機構ならびに水質特性に関する研究
1985年 田中正 筑波大学 (No.80)
 - ③ 多摩川水系の地表水と地下水の交流に関する研究
1994年 樫根勇 筑波大学 (No.160)
- (一般研究)
- ① 日野台地の開発と水環境の変化に関する研究
1991年 角田清美 都立小平南高校 (No.74)
 - ② 多摩川中流域における地学の教材化の研究
1996年 清水政義 都立桜町高校 (No.100)

多摩川散歩

■エコ・たまがわマップ■

川崎・水と緑のネットワーク代表 井田 安弘

川崎市企画財政局（現・総合企画局）は平成8年度以降の事業として、多摩川を軸としたうるおいと安らぎのあるまちづくりをめざして、市民・企業・行政のパートナーシップにより“多摩川エコミュージアム構想”に取り組んでおります。この事業の一環として、参加市民を中心とした編集委員会が結成されて交流紙「エコ・たまがわ」の創刊号が、昨年の11月に発行されました。現在、3号まで発行されているのですが、その2・3号に掲載されたのが「エコ・たまがわマップ」（多摩川河川環境マップ）です。

このマップは、交流紙の創刊号の第一面に述べられている趣旨に基づいて、多摩川エコミュージアム構想づくりに共感した“川崎・水と緑のネットワーク”の会員が、これまでの多摩川とのふれ

あいを伝えるために、昨年の9月以降〈多摩川を調べる会〉を企画して4回におよぶ現地見学の体験をまとめたものです。

これに先立って、すでに4月から8月まで5回に分けて〈多摩川を歩く会〉を催したところであり、この時の体験は神奈川新聞の座談会記事としてまとめられていますが、今回の〈調べる会〉ではやや専門的に多摩川の自然・歴史・民俗・生業等について総括的な調査を行ったものです。

ただ残念ながら、掲載した多摩川の地図が既存のものを転載せざるをえなかった事情や、交流紙の紙面の関係上すべての情報を記載することができなかったことなどで、読み取りにくいものとなったことは否めません。今後エコミュージアム事業の進展に合わせて、より見やすい正確なマップを作成したいものと考えております。

●「エコ・たまがわ」の問い合わせ先

川崎市企画財政局企画室内 (☎044-200-2023)



エコ・たまがわマップの一部分
多摩川エコミュージアム交流紙編集委員会発行 1997年

私と多摩川



初沢川の源流付近（'97.3撮）

大野 迪子

「川の始まりはどうなっているのだろう。」私が子供の頃、祖母はこの言葉をよく口にしましたが、見極めることなく終えました。それから約半世紀、私は山仲間と笠取山に登り、多摩川水源の水干（ミズヒ）で、ぽちぽち滴り落ちるその様と、私が多摩川としてイメージするものとの落差に、とまどいを覚えました。私の多摩川は、中央線や京王線の電車で渡るそれであり、川幅は広く、八王子市を流れる川とは遠い存在でした。

ところがこの小冊子、蘇れ！多摩川「案内川を歩く」を読み、そうなんだ、私の住むすぐ傍の川も多摩川に水を提供しているのだと改めて感じました。ならば水源と呼ばれるものは山ほどあり、例えば高尾山へ登ってみても表参道（1号路）の第一の曲がり角もそれに違いありません。（ここでガマガエルがのそのそ歩いていた。）

さて、今私が一番興味をもっている水源は、この案内川の東側にある初沢川、武蔵野陵に程近い所で南浅川に流入します。この川を遡ると高尾山のすぐ西で線路を横切り、かつて軍によって掘られた巨大地下壕のある山稜を右に、高乗寺、高尾霊園と続く。彼岸の頃は参詣の車がうるさく、のんびり歩くこともできないが、平素はまだまだ快い川筋です。霊園まではまず普通の川、そしてそれから水源までどんな風景があるのだろうか。

実はこの川筋の道、以前はかなり奥まで進めたらしく、当時の山の手引き書には、この道を歩くように記されています。ただ私が、88年に歩きました時はちょうど川護岸の修理中で通行止め。その後この辺の霊園や拓殖大学が整備されたので、公道なのか私有地なのか見当が付きません。それでいて、今購入する2万5000の地図には、きちんと道の記載があるのです。

私はこの2月に初沢川の高尾側山稜の尾根道を歩きました。ここはふつう南高尾山稜主脈縦走をする山々が高尾山口、高尾駅への帰路に使うところで、低山ながら登下降の多いかなり手ごわい道、高尾山の喧騒に比べれば、驚く程の静けさです。ところで最近このコースの南端草戸山付近を町田市が青少年センターの自然観察路として整備し、都心から橋本駅へ来てのバスも便利になったので何れは、中高年登山者が好んで歩く道になるのではないかと思います。

施設未整備の所に、まとまって20～30人の人が来るようになり、そこがちょうど昼食に絶好の場となると大変困った事が起ります。というのも、前述した私の山歩きは、草戸山にもっとも近い峰の薬師奥の院が昼食の場でした。トイレのあるのはそこからかなり下った所で、とてもその為に往復する時間はありません、御想像あれ。眼下には、神奈川県津久井湖、城山湖、案内川支流榎窪沢、そして初沢川などなど。

山歩きをしていると、山頂から少し下りてきた所で「ここは水源涵養林です…」といった掲示を見ることがあり、「しまった！後の祭り」ということも無くはありません。増え続ける登山人口を考えると、もう少し上にも適切な掲示が欲しいような気がします。

多摩川の水源の話から、とんだ方向にそれてしまいました。顧みますれば、この小冊子を送っていただくようになった御縁がどこにあったのか未だに私自身には判りません。しかし十数年に互り律儀に届けられ読ませていただいた挙句の果てが、山々の話で、全く失礼いたしました。

よみがえ

甦れ！多摩川

■湯殿川を歩く■

京王電鉄の京王線の長沼駅で下車して北へちょっと歩くと長沼橋につく。長沼橋の北西のあたりで浅川と湯殿川は合流する。浅川の中洲にはナノハナが咲き乱れて、セグロセキレイも飛び交っており、おまけにカルガモまで泳いでいる、まことに気分の良い風景である。柴橋あたりでは水は濁っている、水中を覗くと大きな鯉がゆうゆうと泳いでいるのが見える。左岸の堤では釣りをしている人もいる。このあたりでは湯殿川は京王線に沿って住宅街のなかを流れている。

乳母車を押して若いお母さんがのんびりと側道を歩いている。新大畑橋の手前あたりでは湯殿川は川べりまで階段状になっていて川に近づけるようになっている。京王線の高架橋の下を歩いて行く。川の中を細い仕切りがあり、左岸側はよどみになっており、右岸側はせせらぎのある流れとなっている。下田橋の手前では、警戒中のパトカーが停車しており、お巡りさんが二三人立っている。交通安全週間なので取締中なのかな。

八王子バイパスの下をくぐって打越大橋へ進む。時見橋には大理石でできた立派な日時計がある。日時計によると、この地点は東経139度21分13秒、北緯35度38分29秒、磁北6.40、標高100.1米八幡橋先あたりでJR横浜線が川上を横断している。ステンレスの標識にカルガモ、カワセミ、オオルリなどの彩色した絵を掲示している。打越橋を過ぎ東橋へ至る。桜並木が堤に続いている。川はかなり濁っている。アワもたっている。このあたりで、兵衛川が合流する。流れにコサギが一匹行んでいる。新山王橋、住吉橋と過ぎ、右岸側は雑木林の丘陵地帯となっておりちょうど新緑の芽生えの時季なのでたいへん美しい。風原橋を過ぎる辺りは高水敷は豊かな植生に恵まれている。時田大橋の川のほとりにはタンポポが固まって群生している。かたくり橋は川の両側が造成中の住宅地で、かつては原野であり、かたくりもたくさん

生えていたので橋の名前が決められたのだろう。川は濁っている。

稲荷橋のたもとに稲荷神社がある。境内の桜の花吹雪を浴びながら、神社の階段に座って、ひと休みする。

立札に、建久元年（1190年）鎮座とかいてあり、ずいぶん昔からあったのだなあと感嘆する。殿田橋の手前の川の段差では、アワが盛大に盛り上がりかたまりになっており、時々、風に吹き飛ばされて雪のようである。10年くらい前の多摩川の調布堰あたりでよく見られた風景の小型版である。このへんでもコサギ、カルガモがいる。釜土橋、大橋、このへんには魚道が真ん中にある堰がある。白旗橋のあたりで川は、二又に分かれて流れており、どうも右側（西側）の川が湯殿川のように見える。右岸には川の高水敷まで降りられる緩傾斜の階段がつくられている。桐橋を過ぎると右岸側は雑木林の傾斜地が岸辺の側道に迫っている。川の柵が疑木のコンクリート製のたいへんよくできたもので自然の景観にマッチしている。境橋、西田中橋、このへんはコンクリートのかたまりでつくりあげた川という感じがあまり親しみを感じない。境橋の先で側道は行き止まりとなり、迂回して川へ戻らないとならない。新関橋、和合橋、このあたりは川がかなり屈曲しており、側道が無くなる。兩岸の茂みの中にヤマブキの花が咲いている。明神橋の先で、山側の上流から流れてきた川が駐車場の石積みにドンとぶつかりすぐ90度方向を変えて下流へ流れて行く。とても自然にはみえない。たいへん珍しいので、あきれてしばらく見ていた。その先、西明神橋はいまどきたいへん珍しい木の橋である。マディソン郡の橋ではないが、木の素朴な感じが妙に郷愁をそそるものがあり、じっくり眺めてみた。

谷あいの茂みの中を湯殿川は流れており、自然の中での川はいきいきと見える。湯島橋から流れは斜面の茂みのなかに消えて行く。拓殖大学の八王子キャンパスの中にある池あたりが湯殿川の水源となるようだ。

翡翠

案内図



財団からのお知らせ

第3回とうきゅう環境浄化財団 助成研究ワークショップのご案内

「都市と水循環～多摩川からの報告～」

多摩川流域は都市化が進み地表面の被覆が雨水の浸透を阻害し、地下水の減少をもたらしております。多摩川流域の支川においても一部では涸渇の状況がみられます。一方下水処理水を利用した清流の復活、雨水浸透槽の設置など、いくつかの試みが行われております。

本ワークショップでは財団の助成研究のなかから関連する研究を選び、研究報告並びに討論を通じて、新たな環境回復の指針を探りたいと思います。

プログラム

13:00	開会挨拶	とうきゅう環境浄化財団 常務理事 コーディネーター	芳村 重徳
13:05	報告1	①「日野台地の開発と水文環境に関する研究」'89助成 ②「多摩川流域および周辺地域の文化的遺産としての古井戸に関する研究」'93～'94助成 東京都立武蔵村山高等学校教諭	角田 清美
13:35	報告2	「多摩川中流域における地学の教材化の研究」'90～'91助成 東京都立日野高等学校教諭	清水 政義
14:05	報告3	「多摩川の支流平井川における湧水と雑排水流入状況の住民による調査と水環境との関連性の検討」'94～'95助成 立川市立第六中学校講師	小山 睦子
	休憩 (15分)		
14:50	総合討論会	コーディネーター コメントーター とうきゅう環境浄化財団 常務理事 千葉大学教授	芳村 重徳 新藤 静夫
16:00	閉会		

日時/平成9年8月7日(木)

13:00～16:00

場所/国連大学 5階

Conference Hall

定員/100名

参加費/無料

※駐車場はございませんので、
車での御来場はご遠慮下さい。



申込方法/

往復ハガキに住所・氏名(勤務先の場合は役職名、自宅の場合は所属団体名)各々の電話番号を明記し事務局までご送付下さい。FAXでも可(要返信FAX番号)

申込〆切/

お申込みは先着順で定員になり次第、〆切ります。(定員以内の場合は、7月20日〆切り)

主催・お申込み・お問い合わせ/

(財)とうきゅう環境浄化財団
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141

寄贈文献の紹介

を収録。

・「多摩学のすすめⅢ」-新しい地域科学の展開-

編者 東京経済大学多摩学研究会 1996年

(株)けやき出版

本書は第I巻副題(新しい地域科学の創造)、第II巻副題(新しい地域科学の構築)の続編で、江戸・東京と多摩の役割(柴田徳衛)、多摩の工業化の軌跡、多摩の輸送体系(姫野侑)、高齢化問題(依田精一)、多摩の緑(広井敵男)

・「多摩川:そのエコバランス」

-都市と河川環境の均衡をめざして-

著者 市川 新 1997年(株)ソフトサイエンス社

著者が20年以上に亘り多摩川を研究フィールドとして取り組み、治水、利水、親水について歴史的変遷をまとめ、将来のあり方を提言している。また、多摩川年表、多摩川の流況表等を収録し、まさに多摩川研究の集大成ともいえる。

〈平成9年度研究助成選考結果〉

去る3月5日第39回定時選考委員会を開催し、平成9年度の研究課題の選考を行い、学術研究8件一般研究6件が採用されました。研究課題は次のとおりです。

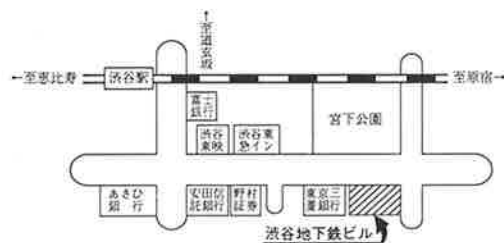
〔学術研究〕

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
多摩川水系の貝類からみた自然環境の現状把握と保全に関する研究	黒 住 耐 二	千葉県立中央博物館学芸研究員
多摩川および周辺水域に棲息するカワウの有害物質蓄積とその影響評価に関する環境化学的研究	田 辺 信 介	愛媛大学農学部教授
奥多摩水系（多摩川・秋川）における瀬と淵の水理及び環境特性に関する研究	池 田 駿 介	東京工業大学工学部教授
川床に分布する付着藻類の生態と意義に関する研究	渡 辺 泰 徳	東京都立大学理学部教授
水源林地帯を主体とした多摩川流域の解析評価と環境管理に関する研究	田 畑 貞 寿	千葉大学名誉教授
多摩川中・下流部における大縮尺地図表現による古代景観の復元的研究	大 石 堪 山	日本開発研究所代表
多摩川人工わんどの変遷と生息環境の評価および保全に関する研究	玉 井 信 行	東京大学大学院工学系研究科教授
多摩川における伏流機構と水質浄化機能評価に関する研究	山 田 啓 一	法政大学工学部教授

〔一般研究〕

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
多摩川中流域の「府中用水」に関する調査研究	島 村 勇 二	聖徳大学短期大学部教授
市民のための多摩川環境情報提供システムとその活用のあるり方に関する調査・研究	鈴 木 聖 子	多摩川センター職員
多摩地域におけるカンアオイ類の分布・生態と保護に関する地生態学的研究	小 泉 武 栄	東京学芸大学教育学部教授
檜原村三頭山「都民の森」公園の施設利用状況調査と自然公園の適正利用に関する研究	青 木 賢 人	東京大学大学院博士課程2年
多摩川をモデルとした「河川環境」の保全に関する住民参加型的手法、制度についての調査・研究	山 道 省 三	東京農業大学客員研究員
多摩川源流部における支流・沢・尾根等の名称とその由来に関する調査・研究	中 村 文 明	多摩川源流観察会会長

- 発行日 平成9年6月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03) 3400-9142
FAX (03) 3400-9141



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1 TEL (048) 831-8125